

## 身近なまちの風景物語(28)

うら  
麗らかな工夫

ずいぶんスッキリした空間だなぁ。空が広い。  
ふだん見る風景と違う。そうだ、電柱、電線がない。  
でも電柱がないのは、たいてい駅前通りとか、商店街  
とかだ。ここは一般の住宅地である。

車庫の前の道路が割と広い。ただし道路は蛇行して、  
見通しは良くない。車の速度はゆっくりだろう。安全  
性を高めているのかな。

道路の両側には石畳のように石が敷かれている。  
ここは歩道のつもりだろうか。でも車庫のすぐ前だし、  
この蛇行する幅の広さからいえば、中央のアスファルト  
を歩くのだろうか。

さて電柱・電線がないとすれば、それに代わる設備が  
あるはずだ。電線類を地中化すると、地上機器(トランス  
等)がどうしても必要になる。

多くの場合は、道路沿いに置かれる。景観に配慮する  
ときには、道路を歩いて目に入らないように、民地の  
建物脇に置かれる時もある。

どこにあるのだろう。歩きながら探してみる。しかし  
見つからない。不思議だ。どこかに電線はあるはずだ。  
いろいろと想像をかきたてる風景である。楽しい。

道を変えて、住宅の裏側を見よう。

住宅の背後は、裏側の住宅の背後と向き合う。その  
隣地境界は業界的には‘背割り’という。米国の住宅地  
では、この背割り線に電柱を設置して電線をつないで  
いる。そして住宅の背後に電線を張っている。道路から  
見えない工夫だ。

この住宅地も米国のような計画地なのか。日本の場合、  
電柱を管理する電力会社は維持管理のため、あまり民地  
に電柱を設置することを好まない。

裏側にまわってみると、背割りの部分に、幅の狭い  
通路があった。歩行者専用の通路だった。この通路に  
電柱があった。謎は解明できた。

この住宅地は自動車の道路と歩行者の通路が計画的  
に整備されていた。住宅は車庫のある道路側に玄関が  
あり、背後に歩行者専用の通路がある。住まい手たち  
は使い分けができるようになっていた。

再び道路側にまわり、あらためて住宅の上方を見上  
げてみる。屋根の向こうに電柱の上端と電線が見えた。

野中 勝利

筑波大学芸術系教授・芸術専門学群長



挿絵：久田琳佳子（筑波大学大学院博士前期課程1年）